実技検査・面接・小論文

1　実技検査

昭和62年度に、一般入試２次試験で実技検査を実施した国立大学は55大学（58%）、60学部（17%）で、前年度と同数（同率）であった。実技検査に関する調査研究は、前年度から継続のものが多いが、ある大学教育学部では、61年度に引き続いて62年度も、２次試験における実技試験のウエイトを大きくしたところ、61年度の結果と同様共通第１次学力試験の総点と２次試験の総点との相関が、受験者全体ではほとんどなくなり、合格者では逆に負の相関が現れたことを報告している。

2　面　接

昭和62年度に、一般入試２次試験で面接を実施した国立大学は40大学(42%)、50学部(14%)で、昭和54年度以降漸増傾向にあった面接実施大学・学部が、62年度は僅かながら減少している（61年度は41大学、53学部)。

面接試験は、多くの医科大学または大学医学部の２次試験に導入されており、医師としての適性を評価するため個人面接形式による場合が大部分のようである。受験生１名当たり試験官２～３名ずつで、15～20分間面接するという実施方法や、高校調査書その他の面接資料を参考にし、面接の評価法（評価基準）を事前に試験官の間で詳細に打ち合わせて行うなど、数年の経験により大学間に共通した面接試験のパターンができ上がってきているように思われる。しかし、多くの大学で実施方法や評価方法について、さらに改善すべく検討する必要があるとしている。また、ある大学では、面接の評価と学力試験成績との相関や、入学後の成績との相関（追跡調査)、面接の評価のウエイトと合格者の入れ替わりについて報告している。

3　小論文

昭和62年度に、一般入試２次試験に小論文を課した大学は、59大学（62%)、100学部（28%）で、61年度（59大学、102学部）に比べ、学部数において微減した。

小論文に関する調査研究は、小論文試験の位置付けと実施方法に関するもの、評価方法に関するもの、評価結果の分析に関するものなどに大別することができる。小論文試験の評価の対象としている能力は、着想・発想・独創性・論理的思考力・構成力・文章表現力などであるとか、特に自然科学領域の資料を用いた小論文では、高等学校の課程内の基本的な知識を基礎にして、粘り強く自分で考える力を評価するものであり、ペーパーテストの問題では測り切れない、異質な、科学的思考面での能力判定方法として評価したいなど、小論文試験に肯定的な意見が多く述べられている。実施方法としては、

資料を読ませ、それに関する課題を与えて論じさせる方法（いわゆる資料型）が概して成功しているようである。それに対して、テーマを与えて書かせる方法(いわゆる課題型)では、テーマによって出来・不出来（運・不運）の差が大きくなるとか、評価が難しくなるなど、いろいろ問題があるようであるが、まだ明確な結論が出るほどデータが集まっているわけではない。また、試験時間は120分、解答は1200字以内が妥当であるという具体的な結論を示した大学もある。

評価方法や評価基準は、評価の妥当性や公平性の確保のため極めて重要と思われるが、①例えば、問題把握力、論理の一貫性、表現の豊かさなどの評価項目をいくつか設定して、各評価項目ごとに具体的な評価の観点とスケールを示して、それに採点者の総合印象点を加味する。②1つの答案を4名の採点者がそれぞれ別個に採点し、それらの点数の合計をその答案の得点とする。③採点者の組合せを答案ごとに変える。④採点は同一場所で、同じ時間に行う、などの具体的方法を報告している大学もある。

小論文の成績が、共通第1次学力試験の成績や2次試験のどの成績とも相関しない（相関が極めて低い）ということは、ほとんどの大学に共通した傾向のようである。小論文には、通常の学科試験とは異なる能力評価が含まれていると断言している大学がある一方、小論文試験の実施方法や評価方法について、さらに継続的な検討を要すると結論している大学もある。また、昭和62年度に小論文試験を新たに加えたある大学学部では、小論文が加わったことによって従来ならば不合格になるべき者が合格し、約11%の受験生が影響を受けたと報告している。

高校調査書

各大学における共通第1次学力試験への対応も定着し、次第にそれを重視する方向に向かっている過程で、高校調査書に対する分析はますます広範化しつつある。また、推薦入学制の導入、欠員補充第2次募集に伴う高校調査書の活用、さらには高校調査書を共通第1次、第2次試験と併せて配点化する大学もあり、高校調査書の大学入試全般に占める位置付けは高まりつつある。これらのことは、各大学において社会的要請に対応した大学入試の改善に努力しつつあることを現していると評価してよいであろう。

高校調査書と入試成績

共通第1次学力試験成績、第2次学力検査成績、第1次第2次総合成績と高校調査書との相関についての分析は、従前と同様に相当多くの大学で行われている。その結果は一般的に見て、共通第1次との相関係数は高く、第2次との相関係数は低い傾向を現している。